

氏 名	張 簡 敏 川
	ちよう かん びん せん
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 294 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 41 年 6 月 21 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	Über das lymphatische Gewebe im weiblichen Geschlechtsorgan des Macacus cyclopis (台湾猿の雌性生殖器官におけるリンパ組織について)
論 文 調 査 委 員	(主 査) 教 授 堀井五十雄 教 授 西村秀雄 教 授 岡本道雄

論 文 内 容 の 要 旨

雌性生殖器官について、リンパ組織の分布様式を、比較解剖学的に観察するため、著者は、成熟台湾猿 3 例を用いて、卵巣およびこれにつづく生殖道の横断連続切片標本を作成、これを通じて、上皮下リンパ装置の発達度を、組織測定的に精検し、次の成績を得た。

1) 台湾猿の雌性生殖器官系では全例を通じ、リンパ組織は、未分化リンパ装置、すなわちリンパ浸潤或いは孤立小節の外、高度に分化したパイエル型集合小節の形で発現する。この所見はすでに、「くもざる」の例についても証明済みであるところからみて(梅津)、パイエル集合小節の雌性生殖器官における造生分化は、全猿類に共通かつ一定した現象とみなしうる。

2) 台湾猿の卵巣では、リンパ組織はリンパ浸潤の形で大部分、皮質深部から髄質域にかけて造生分布、かつ卵胞に近接して位置する。かようなリンパ組織の発達容姿は、文献的にみて、人の初生児卵巣におけるそれとはほぼ一致する(国頭)。

3) 台湾猿の卵管は全例を通じ、リンパ組織の分布を欠く。人の卵管でも胎生時、乳幼期を通じてリンパ装置は未発生、成人に及んではじめて分化発達する(内田、国頭)。

4) 台湾猿の子宮域においては、リンパ装置の出現を、リンパ浸潤の形で、頸部に当って、集中的にみとめるが、この像は、人初生児で、子宮壁にみるリンパ組織の発達段階に相当する(国頭)。

5) 本例の膣壁では、顕著な、パイエル集合小節の恒存性分布をみとめ、この種装置は本器官の尾側部で、質的或いは量的に、最高の発達を遂げ、ここから首側部に向って、数とともに、大きさを減少する。これに反して、未分化リンパ装置の方は、膣の首側部において、集中的な集積を示し、該部から尾側部に向って漸減している。かくして、本例膣域では、パイエル型集合小節と未分化リンパ装置の間で、代償的発達度の相関関係が著明である。この現象は、両種リンパ組織が、人類腸管で、胎生末期に示す發育機構と、基本的に合致する(長田)。

6) 終りに未分化リンパ装置を、本例生殖道全体にわたって、通覧すると、これは、膣の首側部に、圧

倒的に集中，ここから上，下の方向に，漸減分布するが，この像は，猿例では，子宮腔部の範囲内に止まり，成人において，はじめて生殖道全域に拡大する。

論文審査の結果の要旨

消化，呼吸器系リンパ組織の研究に比べると，泌尿，生殖器系リンパ組織は，その分布も比較的乏しく，その研究も少ない。著者は台湾猿雌性生殖器リンパ系組織の研究を行ない，その結果を堀井，伊藤研究室における諸他哺乳類の研究の結果と比較，検討した。

1) 台湾猿卵巢におけるリンパ組織はリンパ浸潤の形で，皮質深部で卵胞に近接して出現し，ヒト初生児の知見と一致する。

2) 台湾猿卵管は全例全域にリンパ組織を欠く。この所見もヒトの胎生期，初生期の所見に一致する。

3) 台湾猿子宮のリンパ組織はリンパ浸潤の形で，頸部に集中的に出現する。この所見もヒト初生児における子宮壁リンパ組織の発育段階に相当する。

4) 腔壁には集合リンパ小節を認め，尾側部に向って質的にも量的にも漸増する。これに反し未分化リンパ組織は首側部に集中し尾側部に漸減し，両者の間に代償的発育関係を認めるが，この現象はヒト腸管でパイエル板と孤立リンパ小節の発育の関係に認められるものとその軌を一にする。

5) 未分化リンパ組織の分布発育はヒトでは腔首側部に集中し，これから上下に向って漸減するが，サルでは尾側部にのみこの現象を認め，首側部では子宮腔部以上にはおよばない。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。